

「ヒトゲノムを解読した男：クレイグ・ベンター自伝」

J. Craig Venter (著), 野中 香方子(訳)(化学同人)(2008年12月刊行)

A LIFE DECODED - My Genome: My Life -

「タンパク質の社会」関連の本なんてそうは出ないよなあと、ぼやきながら、大型書店の科学書コーナーをぶらついていて出会ったのが本書である。眼光鋭いベンターの表紙が気になった。立ち読みを始めるとこれが実におもしろい。すぐに買うことを決め、分厚い本ではあるが、読める時間が確保できるのが楽しみになった。「タンパク質の社会」とはかけ離れた本ではあるが、ぜひお勧めしたい。

クレイグ・ベンターについてはみなさんよくご存じであろう。蛋白屋を自認する評者も、ヘモフィルスやマイコプラズマゲノムの解読(1995年)、ヒトゲノム解読(2001年)、最近ではマイコプラズマゲノムの完全人工合成(2008年)など、ベンターの研究にはいつも驚かされてきた。中でも圧巻は、ベンター率いるセレーラ社という一介のベンチャー企業が世界の公的なヒトゲノム解読コンソーシアムに挑んで同着となった一件であろう。「異端児」、「暴れん坊」と形容されがちなベンターとはどのような人物なのか？ 研究のモチベーションは何なのか？

どのようにしてヒトゲノム解読という大それたことが可能だったのか？

本書はそのような疑問をある程度解消してくれ、読んだ後にそれぞれがもつ「ベンター」観が変わるのはまちがいない。現在の圧倒的な存在感に至るまでの幼少期から青年期までのエピソードにして、際だつおもしろさでまったく飽きさせない。1946年生まれでアメリカン60'sを駆け抜けた先はベトナム戦争が待っていた。そして、そのベトナム戦争がベンターの転機となる。IQは非常に高いものの成績がからきし悪かったベンターが衛生兵になった経緯、ベトナムでの実戦体験のリアルさ、戦地で生命科学を志す決意、復員後の大学進学、・・・どれも波

瀾万丈で人間くささ(というか男くささ)に満ちあふれている。映画化できるのではないかと思うほどだ。

大学に入ってアドレナリン受容体の生化学で名を成していき、ゲノム研究に突入するあたりからは、内幕物としても詳細、かつ、サイエンスの裏表を教えてくれる。ワトソンをはじめとして敵となった人々への率直な物言いは、そこまで白状してもいいのか、というくらいに痛烈なものもベンターらしい。ただ、最後の人工細菌を創ろう、という辺りは正直物足りない、というかあまり毒気がない。

また、ベンターは自身のゲノムを解読して公開している人物の一人でもあり、多くのコラムにて自分の遺伝子に関するコラムが数多く散りばめられているのも本書の特徴である。性格や性向と遺伝子変異の関連がたくさん紹介されているが、各自が自分のゲノム情報を管理するようになったときにどうなるかの先駆けみたいなものだろう。この辺も含めて評者なら邦題を「自分のゲノムを解読した男」としたいところだ(タイトルで言えば、「男」と付いているところがベンターらしいではないか。これがワトソンの自伝ならだれも「男」とは付けないうだろう)

さて、本屋からの帰り際、入口近くで平積みになっている別の「男」の眼光が飛び込んできた。清原和博の「男道」である。ベンターと清原を同列にするのはどうかと思われるかもしれないが、「番長」清原に「暴れん坊」ベンター。どちらも書名に「男」が似合う点も通じる。その眼の力強さはただものではない。

ベンターの今後がますます楽しみである。(田口 英樹)

